

「戦争と死」の記憶と語り その個人化と社会化

関沢まゆみ

Memories and Narratives of "War and Death": Their Personal and Social Impacts
SEKIZAWA Mayumi

- ①はじめに—個人の記憶と語りへのアプローチ
- ②戦没兵士の死をめぐる語り—「戦争体験の記録と語りに関する資料調査」の分析より
- ③フランスの二つの事例より
- ④おわりに—「死者」の記憶と「事件」の記憶

【論文要旨】

本論文ではまず国立歴史民俗博物館「戦争体験の記録と語りに関する資料調査」(全四冊、二〇〇三・二〇〇四年)のデータから、戦没兵士に対して、生還した帰還兵士の場合と、戦没兵士の遺族の場合との両者において、それぞれどのように彼らの死が受け止められているのか、その対応についての分析を行った。両者共に「体験した人にしかわからない」という語りの閉鎖性が特徴的であった。そこで、戦争と死の記憶と語りの特徴をより広い視点から捉えなおす試みとして、日本における戦没兵士や広島原爆被災者に関する語りを含めて、さらにフランスの、ナチスによる住民虐殺が行われた二つの町の追悼儀礼の事例調査を行い、日本とフランスとの差異についての考察を試みた。論点は以下の三点にまとめられる。第一に、戦争体験の記憶には大別して、「死者の記憶」と「事件の記憶」の二つのタイプがある。死者の記憶の場合には、戦闘員個人に対して追悼、慰霊の儀礼が行われる。それに対して事件の記憶の場合には、一つは非戦闘員の大量死である悲惨な虐殺の場合、たとえばそれはフランスのグエヌウの虐殺やオラドゥール・スール・グラヌの虐殺から日本のヒロシマ、ナガサキの原爆まで多様な事実があるが、その悲惨は戦争という「愚行」と読み替えられる。そして、死者の記憶はいわば「個人化される」記憶であり、事件の記憶は「社会化される」記

憶であるといえる。個人化される死者の記憶と表象は「死者」への追悼、慰霊の諸儀礼としてあらわれ、社会化される「事件」の記憶は、戦争と殺戮という「愚行」への反省と懺悔の意識化へ、また一方では戦勝の記念と顕彰の行事としてあらわれる。その個人化される記憶の場合には時間の経過とともに体験世代や関係者世代がいなくなれば、記憶の風化と喪失へと向かい、一方、社会化される事件の記憶の場合には世代交代を経ても記憶はさまざまな作用力が介在しながらも維持継承される。第二に、フランスのグエヌウやオラドゥール・スール・グラヌの虐殺の場合には、死者への追悼とともに彼らのことを決して忘れないという「事実の記憶」を重視する儀礼的再現と追体験が中心となっているのに対して、日本の場合は、「安らかに眠ってください」という集団的な「死者の記憶」が重視され、その冥福が祈られている。そこには、日本とフランスの自我観・靈魂観の相違が反映していると考えられる。第三に、フランスにおいても日本においても「戦争と死」の記憶の場として民俗的な伝統行事が有効に機能していることが指摘できる。フランス、グエヌウでは、五月に行われるトロメニにおいてペンクエレットという新しいスタシオンを組みこんでおり、広島と長崎の場合、八月の盆の月に原爆記念日が、そして一五日には終戦記念日が重なる、死者をまつる日となっている。

①はじめに―個人の記憶と語りへのアプローチ

近代日本の戦争、とくにアジア太平洋戦争をめぐる研究は近年とくに歴史学の分野をはじめ民俗学や社会学などの各分野において活発である。吉田裕によればこのような軍事史・戦争研究の活発化と学際化は一九九〇年代以降のことであるという⁽¹⁾。またその新しい研究動向の一つとして指摘されているのは国家から兵士へとというその視点の移動である。鹿野政直は「戦後の軍事史は、何よりも軍国主義研究・帝国主義研究・戦争史研究の一環あるいは中核として展開せざるをえなかった(中略)しだいに力点を民衆と軍隊、民衆と戦争の関係へと移してきた」⁽²⁾として、「それは、国家が戦争したという視点から一人ひとりが戦場へゆ

かされ、またいったという視点への移動であった。その意味では、極言すれば軍事史は、国家史の主題から民衆史の主題へと移りつつある⁽³⁾と指摘する。そのような、国家と個人という問題を意識的に分析対象とした例としてその鹿野「軍事郵便にみる兵士」をあげることができる。鹿野はその論文においては日中戦争からアジア太平洋戦争へと戦況が拡大していくなかで、動員された戦場の兵士にとって「なぜ自分がここにいるのか」という問いにどのような答えを見出していたのか、について戦地から故郷の恩師にあてて書かれた約八千通の郵便資料の分析を行っている。そして彼らの文面には「東洋永遠の平和」のためと書かれている点に注目し、その常套句を用いる兵士たちには国家の唱える戦争目的の口移しだけでなく、動員された自分と動員した国家との間隙を埋めるために、また郷里に残してきた家族の暮らしへの憂いを断ち切るために正義の戦争という観念に頼る必要があったのだと指摘している。また藤井忠俊「兵たちの戦争―手紙・日記・体験記を読み解く」⁽⁴⁾、原田敬一「国民軍の神話―兵士になるといふこと」⁽⁵⁾、河野仁「玉砕」の軍隊(生還)

の軍隊⁽⁶⁾などにおいてもやはり戦争と兵役という極めて国家レヴェルのことがらに個人がどのように対応してきたのか、という視点での分析が行われている。

このように兵士個々人の戦争体験の記憶へと注目する場合、その資料としては第一に、戦時中に書かれた手紙や手記、日記、戦後に書かれた体験記や回想記などの記録類、第二に、戦争関係記念碑や戦没者墓石などの「物」資料、第三に、戦争体験者への聞き取りから得られる資料情報、の活用が積極的になされるようになってきている。

このような学界動向のなかで、国立歴史民俗博物館では二〇〇二年度と二〇〇三年度に二年度にわたって、都道府県ごとに戦友が戦死した元兵士の例と夫が戦死した妻の例をそれぞれ一例ずつを対象として、共通の質問項目を設定して計五一名の調査委員による資料情報収集を行った⁽⁶⁾。

この調査を提案し推進した筆者は、質問項目の選定のために事前の二年間、実際に東北地方や近畿地方の元兵士の男性や戦争未亡人の女性の方々に会って、インタビューを行い、その内容の分析作業を試みていった。その準備段階で、筆者がよく耳にした言葉は、戦争未亡人の場合には「周りの人はあの人は死んだ、死んだというけれども、自分はどこかに生きているのだと思っている」、「これは経験した人でないとわからない」、「という言葉だった。また元兵士の場合には「同じ経験をした者でない」とわかない。だから戦友会の集まりなら何でも話せるが、誰にでも話せるものではない」、「自分が生きている間は戦友の慰霊ができるが、死んだらどうなるのだろうか心配だ」という言葉だった。かれらの言葉からは、自分の経験や気持ちは体験した人でなければわからない、という意識の上での強い閉鎖性が強調されていることが注目された。そして、このような閉鎖性こそが戦争体験者の高齢化にともなう戦争体験の風化、そして彼らの死とともに戦争の記憶が消滅してしまうであろうと

いう危機感を募らせた。今回の調査プロジェクトは、このような戦争体験者が語る最後の機会かもしれないこの時期に、とくに個人的体験のうち語り出される部分だけでも記録しておこうということで実施したものであったが、今後は語られることと語られないこととの関係性をも視野に入れた情報収集とその分析方法とがさらに検討されねばなるまいと考えている。

本論では、第一に、この『戦争体験の記録と語りに関する資料集成』計四冊（以下、『資料集成』と略す）のデータをもとに、戦闘死もしくは戦病死したいわゆる戦没兵士に対して、生還した帰還兵士の場合と戦没兵士の遺族の場合とで、それぞれのように彼ら戦没兵士の死が受け止められているのか、その実態について、帰還兵士の戦没兵士に対する対応と、遺族のとくに妻の戦没兵士に対する対応と、その両者をあわせ検討してみることとする。

第二に、その日本における戦没兵士や非戦闘員であった広島原爆被災者に関する語りを含めて、戦争と死の記憶と語りの特徴をより広い視野から捉えなおす試みとして、私たちが調査を継続しているフランスの、ナチスによる住民虐殺が行われた二つの町の追悼儀礼の事例紹介を行うこととする。

私たちは日本の民俗文化の研究をより深化させるために、外国の事例調査を踏まえながらその視点で日本を見直し、それぞれの特徴を考察してみたいということを目的の一つとして、約十年前からフランスの農村や地方都市で伝統的な祭礼行事を対象とする民俗調査を試みてきている。調査は日本の場合と同様に、行事や儀礼の準備から当日の実態へまた事後の処理についてその参与調査を行い、またさまざまな立場の参加者への聞き取り調査などを継続的に併行させてきている。その調査の対象を、伝統的な祭礼行事から戦争関係の追悼儀礼や体験者への聞き取り調査へと広げていく過程で、あらためて戦争の犠牲者をめぐる追悼儀礼

のあり方に日本とフランスとの大きな違い、また戦争体験者の語りにおける日本とフランスとの大きな違い、が注目されてきた。

戦争の終結とは、戦勝国と敗戦国との決着を意味するが、第二次大戦の敗戦国という国家レヴェルの比較では、これまで歴史学や社会学などにおいて、ニュルンベルグ裁判と東京裁判、賠償・補償問題や戦争の記憶をめぐる日本とドイツの比較がなされてきている⁷⁾。そして、戦勝国の戦死者は英雄として顕彰されるが、一方敗戦国の戦死者にはそれはない。しかし、ここでは家族や友人という個人レヴェルにおいては、戦勝国の場合も敗戦国の場合もその死の悲しみと惨事の記憶にかわりはないということを前提にする。つまり、本論では日本とフランスとの事例比較を通して、両者の差異に注目し、相互の対比によってそれぞれの特徴を明らかにする方法(contrast-oriented approach)を用いることにする。具体的には、フランス北西部のブルターニュ地方のグエヌウ(Guenou)と、フランス中部のリムーザン地方のオラドゥール・スール・グラヌ(Oradour-sur-Glane)という、ドイツ軍およびナチス親衛隊(SS)によって一般市民の大量虐殺が行われた町の事例を紹介する。そして死者の追悼儀礼と体験者の語りにもみられる日本とフランスとの相違に注目して、それぞれの特徴を析出してみることにはしたい。

そして、これらの作業を踏まえることによつて、第三に、戦争と死の記憶の、個人化に向かうそれと、社会化に向かうそれとの差異についての考察を試みることにする。

② 戦没兵士の死をめぐる語り―「戦争体験の記録と語り」に関する資料調査」の分析より

(1) 帰還兵士と戦死した戦友―生死の瞬間の共有と「身代わり感」

今回の資料調査は全国四六都道府県から参加を得た計五一名の調査委

員が任意に選定した資料情報であり、もちろん限定的な情報である。サンプルリング、情報選定の上での境界性は自覚しながらも、この種の作業を積み重ねていくことに意味があるものと考えての試論である。そこで、今回の資料調査のデータのなかで注目されたのは、生きて帰った兵士のなかには自分が強く意識している特定の親しい戦友の慰霊を行っている例が少なくないという点であった。どうしても忘れられない戦友がいるのである。そこで、元兵士がどのような動機で、特定の戦友の慰霊を意識するようになったのか、というその動機に注目してみる。

『資料集成』に収められている五五個の事例の中から、①情報提供者名 ②略歴 ③強く意識している戦没した戦友 ④二人の関係 ⑤戦死状況 ⑥帰還後の行動 ⑦現在の思い ⑧戦後の慰霊など、についての情報に詳しい北海道の山鼻節郎氏の例、千葉県の大川哲氏の例、長野県の増田芳信氏の例、青森県の小屋敷清氏の例の四つの事例を抽出してみると次のようになる。

〈事例1〉北海道・山鼻節郎氏の例⁸⁾

山鼻節郎氏（大正一〇年（一九二一）生まれ）は昭和一七年一月一日旭川第二部隊第二十六連隊に入隊し、昭和一九年二月二三日動員下令により満州から南方メレヨン島へ移動、敗戦時には関東軍密山県西東安生八部隊第一大隊、伍長となり、昭和二一年正月頃函館に帰郷した。山鼻氏は同郷の部下であった真壁泰氏の死が忘れられないという。メレヨン島で陣地を作っている最中に敵の艦載機による空襲にあった。警報もならないうちにきた。「ばばばばと空襲された。私ら音が聞こえたから一早く防空壕さ向かって走った。この男が逃げ遅れた。よその防空壕に向かう途中でやられた。腸が出て（中略）看病にならない。死んでいった姿をみると神も仏もないものだ」という。山鼻氏は帰郷後すぐに真壁氏の実家を訪問した。真壁氏の祖母に「うちの泰が死んで、あんた

生きてきたの。生きてきた人が憎い」といわれた。それから「心の中で思っていればいいことだから、なんぼ拜んだって生き返ってくるわけでもないし」という思いだったという。山鼻氏は今でも真壁氏の死に様子が目に浮かんでくるという。昭和五四年、外地引き揚げ厚生省主催中部太平洋遺骨収集団に参加し、メレヨン島へ行った。墓地だったと思われる所に高さ約一メートルの紫檀の木があったので、切ってもらって持ち帰り、観音像を彫り、函館の善光寺に奉納した。そして昭和五六年にメレヨン島戦没者慰霊祭（三十三回忌）を行った。また、昭和五年、戦友会、関係者でお金を出し合い、現地に「平和の鐘」を建立し、「友よ安らかに眠れ」と記した。学校の生徒にその鐘を朝晩鳴らしてもらっている。その他個人的には「戦死病没者各々諸英霊位」と書かれた位牌（『資料集成』一、五二ページ）を自宅でまつている。

〈事例2〉青森県・小屋敷清氏の例⁹⁾

小屋敷清氏（大正九年（一九二〇）生まれ）は昭和一六年に北部第十六部隊に入隊し、敗戦時には第三機動旅団軍曹であった。小屋敷氏は同郷でしかも同じ日に陸軍伍長に任官した伊藤伍長の戦死が忘れられないという。小屋敷氏と伊藤氏の海上機動第三旅団（轟部隊）第二中隊、輸送船大誠丸は北千島防備から北海道防備となり、釧路へ行く予定が出航前日の命令で沖繩救援に変更になった。昭和二〇年四月一三日に千島列島北部の幌筵島柏原ほろひしとくを出航した。そして一九日に津軽海峡でアメリカ潜水艦の魚雷を受け、沈没し、六九名が海没した。小屋敷氏は七、八時間間の漂流の後やっと救助され、その後海没者の遺体処理にあたった。厚賀高原で五三体の遺体が火葬に付された。そのなかに伊藤氏の名札と骨箱があった¹⁰⁾。帰郷後、伊藤氏の家族に会った。最後の様子をきかれた。できるだけ詳しく話した。死に顔が穏やかだったことを強調した。小屋敷氏は「なぜ、あの時、あいつは死んでしまったのか。死んだ者と生き残っ

た者はなぜどうしてどこがかったのか」と考えるところ。昭和三十三年、初めて轟会で集まって、青森県正覚寺にて十三回忌の法要を営んだ。

〈事例3〉千葉県・大川哲氏の例⁽¹⁾

大川哲氏（大正八年（一九一九）生まれ）は第二十七師団支那駐屯第三連隊第一大隊本部陸軍准尉（終戦時は曹長）で、昭和二十一年三月か四月頃復員してきた。大川氏は部下の埼玉県出身の召集兵、小島甚作伍長の死が忘れられないという。小島氏は昭和二〇年七月一五日、遂川飛行場にて襲来した敵機の機銃掃射によって戦死した。その時、大川氏はU字溝に避難するよう声をかけたが間に合わなかった。敵機に撃たれた際、体が四散し、大川氏がその肉片を拾った。帰郷後、遺族に手紙を出したが返事はなかった。大川氏は「夜眠れない事が今でもある。戦闘状況を思い出す。自宅の敷地内に建立した鎮魂碑を毎朝、お参りしている」という。大川氏は戦友会活動も熱心に行った。昭和五五年、五七年、五九年、六二年の四回、戦友会で北京、石家荘、天津、武漢、上海、鄭州、長沙、南昌、遂州、保定などの戦地訪問を行った。その際、遺体埋葬地が判別できなかったため土を持ち帰り、千葉県護国神社に埋めた。昭和五三年に千葉県護国神社に鎮魂の碑を建立し、毎年一〇月三〇日に慰霊碑の前に集まり、諸霊の安寧を祈願したが、戦友会は平成一三年一〇月三〇日を最後に解散した。戦友会解散後、平成一四年五月に大川氏の自宅敷地に鎮魂碑（『資料集成』一、六一八ページ）を建立し、個人的に戦友の慰霊を続けている。

〈事例4〉長野県・増田芳信氏の例⁽²⁾

増田芳信氏（大正一一年（一九二二）生まれ）は歩兵第六十二連隊第六中隊伍長であった。増田氏は隣村出身の部下、斉藤公平兵長の戦死が忘れられないという。斉藤氏は昭和二〇年六月二六日、印度支那フット

省ヘンロン村附近で戦死した。この日、笠井准尉を小隊長として越南独立同盟（略称ベトミン）覆滅の命を受けて、ヘンロン村西方へ舟五隻に分かれて川を下った。その移動中、小銃の音がパンパンと二、三発聞こえ、藪の間からベトミン兵の姿が見えた。増田氏は敵に待ち伏せされているのに気づき、「撃て」と命令した。一五、六発打ち軽機を舟に下ろしたその時、パチンという音がして斉藤氏の鉄帽に敵の弾が当たり、前のめりに水中に落ちていった。その時、増田氏自身は「斉藤」と名前を呼んだだけで何もできなかった。翌朝、増田氏は斉藤氏の遺体引き揚げを行い、近くの小学校に運んで、そこで火葬にした。増田氏が帰郷すると、斉藤氏の両親がすぐに訪ねて来た。両親は「お国のために亡くなったのだから仕方がない」といい、増田氏に当時の様子を聞いた。遺品（日記）を両親に渡した。命日の六月二六日に今でも墓参をしている。都合でいけないときにはよく彼の夢をみた。斉藤氏のことはいつでも頭から離れない。

〈事例5〉京都府・前川清一氏の例⁽³⁾

前川清一氏（大正一〇年（一九二一）生まれ）は第六十二師団独立歩兵第十一大隊石三五九二部隊の軍曹であった。前川氏は同郷でしかも同じ日に出征した岡田春雄同部隊伍長の戦死が忘れられないという。前川氏の檜島村から三人が出征することになり、出征が決まると近くの中書島の遊郭に出かけたり、酒を飲んで遊んだ。そして昭和一七年二月九日に村民全員に国鉄宇治駅まで見送られた。昭和二〇年五月二日、沖繩戦（浦添前田の戦闘）で岡田氏が戦死した。戦死した場所の土を採って持ち帰り、その土を遺骨の代わりに墓に入れた。両親にも会った。目が覚めている時は（彼のことを）常に意識している。旧檜島村出身の戦没者三二名の共同墓地に今も参っている。また、前川氏は慰霊のために戦後、五八回も沖繩を訪れている。戦友が亡くなり、参加者の減少により、

平成一〇年、第四〇回戦友会を節目に昔陽会は解散したが、前川氏は沖繩戦で亡くなった独立歩兵第十一大隊出身者の名簿を完成するために現在も努力している。

〈事例6〉鳥取県・信原和知氏の例¹⁵⁾

信原和知氏（大正一三年（一九二四）生まれ）は昭和一八年四月、鳥取中部四十七部隊に入営後、ビルマ派遣第五十四師団第二百一連隊第三大隊第九中隊第二小隊に転属し、軽機関銃手となり、終戦時は伍長であった。この第九中隊は約一八〇名のうち生存者はわずかだったという。信原氏は昭和二〇年八月二十九日にビルマで敗戦を知ったが、その時の感想として、「戦死した友の姿が浮かんだ。感激というか、なんと叫ぶべきか。生き延びた不思議さに胸がいっぱいになったり、来るべき運命を案じたり、複雑な気持ちだった」と述べている。そして、昭和三四年二月から彫刻を始めた。戦死した人のことが忘れられないので、（彼らの）墓の気持ち（つもりの意味か）で彫っている。ビルマの狛犬を彫ってそこに名前を書く（『資料集成』三、一九三六ページ）。これが戦死した彼らの墓だという気持ちである。また、写真を複製して額に入れて、収蔵庫に掲げている。これも戦没者のことを忘れることはできないからだという。昭和五九年から六回、ビルマに慰霊に行った。平成三年にはビルマに慰霊塔を建立し落慶法要を行った。また昭和五三年八月一日に鳥取市の円護寺にビルマ戦没者慰霊塔を再建した。

これらの事例により、戦没兵士を強く意識する動機としては次の点が指摘できる。戦死状況の記述および現在の思い、から、同じきわどい状況、まさに生死の分かれ目にありながら「死んだのがあいつで、自分ではなかった」という、時間と空間を共有しつつも生死の分かれ目を体験したということ、つまり死の瞬間の共有感であり、「あいつが身代わりになっ

たのだ」という、身代わり感である。いわば、死者への自己投影といってもよい。これこそが、生還兵士が戦没兵士を強く意識する基本動機となっていることがわかる。

（2）戦没兵士と遺族―遺骨の有無と死の受容

日本の民俗にみられる伝統的な考え方としては、「豊の上で死にたい」とか「親の死に目に会う」という言葉がある。死者にとつては家族に看取られながら死を迎えることが、また家族にとつても家族の死を看取ることが理想とされてきた。これを通常の死とするならば、その対極にあるのが戦死であった。遠く離れた地で、家族に看取られることもなく、また遺体はもちろん遺骨も家族のもとに帰らない異常な死に方であった。そこで、看取りのなかった死、遺体のない死、に対して、家族がどのようにその死を受け止め、受容していったのか、この点について次に注目してみる。

『資料集成』に収められている五三個の事例の中から、戦争初期の事例として昭和一二（一九三七）年出征の新潟県的小林智慧氏の例、戦争末期の事例として昭和一八（一九四三）年出征の岐阜県の熊谷文子氏の例と昭和二〇（一九四五）年出征の群馬県の奈良つや氏の例、の三つの事例を抽出して、①情報提供者名 ②出征 ③戦死 ④公報 ⑤遺骨引取り ⑥内容 ⑦葬儀から納骨、墓石建立まで ⑧問い合わせ ⑨虫の知らせ ⑩死の受容まで、という項目に分類し直してみると次のようになる。

〈事例1〉新潟県・小林智慧さんの例¹⁶⁾

小林智慧さん（大正二年（一九一三）生まれ）の夫、佐一氏は昭和一二（一九一七）年八月九月に出征し、新発田歩兵第十六連隊陸軍第二師団に所属し、昭和一二（一九一七）年十月二二日に上海大家屯東方付近で戦死した。軍曹で

あった。戦死後すぐに智慧氏に部隊から連絡があり、新発田市に行き、将校から遺骨を渡された。遺骨は骨の一部であった。遺骨を受け取ってからすぐに相川町の夫の実家で、親族が集まり、仏式で葬儀を行った。戦死者であるからといって特別な形式ではなく普通の葬儀で親族中心に行われた。葬式後、夫の実家の墓がある広永寺に納骨した。墓石は一周忌を待たずに、智慧さんが国からの見舞金で立てた。智慧さんがあらためて夫の戦死を確認することはしなかった。智慧さん本人には記憶がないが、智慧さんの子供の記憶によれば戦後かなり後に、夫の部下が状況を説明してくれたことはあったという。夫の死について虫の知らせのようなものはなかったし、戦死について当時は国のためであるから仕方がないと思った。

〈事例2〉福岡県・大楠ツチエさんの例¹⁷⁾

大楠ツチエさん（大正九年（一九二〇）生まれ）の夫、仁九郎氏は昭和一七年二月二〇日に出征し、第四十七砲台司令部、暁九七三六部隊に所属し、終戦時は陸軍伍長であった。昭和一九年一月二日にインドにて戦死した。戦死の公報が入ったのは昭和二十一年七月頃で、遠い親戚にあたる同じ部隊だった人が義父に連絡したことによって戦死がわかった。その後、公報が入った。昭和二十一年七月頃、村にまとめて遺骨が送られてきて村の体育館で合同慰霊祭が行われた。「遺骨は無くても白木の箱に紙だけが入っていた」。その翌日か翌々日に自宅で法事を行い、紙片と爪を納骨した。義父が同じ部隊だったという福岡の人に会いに行つて最期の様子を聞いてきた。ツチエさんも尋ねていったがその人には会えなかったという。「虫の知らせはある。夢うつつていたときに、夫がずぶ濡れになって帰ってきて『まあ、どうしたの』というようなことがあった。不吉な予感はしていた。でもまさか死んでいるとは思わなかった」。今はあきらめているが、公報が入ってもどっかで生きています。

という思いできた。小野田さんのようなこと（昭和五七年にルパング島から帰還）もあるので。『生きとつてくれれば現地の人と結婚してもいいわ』と思っていた。「これまで三回、慰霊巡拝でニューギニアに行つた。戦没地に行くのと魂がよつてくるような気がする。体が痺れるくらい」。巡礼に行った時、戦没地近くの海岸で拾った珊瑚を箱の中に入れてきた。これも墓に収めた。

〈事例3〉岐阜県・熊谷文子さんの例¹⁸⁾

熊谷文子さん（大正七（一九一八）年生まれ）の夫、孝氏は昭和一八年一月一八日に出征し、岐阜第四部隊に所属し、昭和一九年七月八日にサイパン島で戦死した。兵長であった。戦死の公報が入ったのは昭和二十一年九月二二日で、昭和二十一年一月に多治見、養正小学校に遺骨を引き取りに行つた。遺骨はなく、木片が入っていただけであった。遺骨が戻った翌月二月二二日に町葬が行われ、その後熊谷家の墓に納めた。墓石は五十年忌に建てかえた。夫の戦死について、戦後しばらくして、文子さんは生還した中隊長だった人に問い合わせの手紙を書いた。また戦後かなり経ってからサイパンからの生還者の会合に参加した。死んだ時には虫の知らせのようなものはなかったが、公報が届いてから後、薪をしまつてある場所で尾の切れたへびを見て、父親は孝さんが戻ったのだと言つて泣いた。文子さんも公報が入るまで、夫は生きていると思つていた。靴の音が聞こえると、夫が戻つたのだと思つた。公報が入つてからも死んだことが認められなかった。昭和四六年になってはじめてサイパンに行き、きれいな海を眺めた時に、ここで眠っているのかなと感じることができた。夫が戦死したとされる場所に近い洞窟には、当時まだ骨が散乱しており、そこで見つけた大腿骨を持ち帰ろうとしたができなかった。小さな骨をマッチ箱に入れて持ち帰った。その後も、サイパンに行くたびに骨を拾つて持ち帰った。

〈事例4〉群馬県・奈良つやさんの例¹⁹⁾

奈良つやさん（大正八年（一九一九）生まれ）の夫智美氏は昭和二〇年五月に第一七七野戦飛行場設置隊に所属、その後昭和二〇年八月二一日に朝鮮海峡（東経三五度、北緯二九度付近）にて戦死した。軍曹であった。つやさんのもとに昭和二三年三月一日付「死亡認定書」が届いたが知りたい情報はなかった。その後、昭和二三年五月に公報が入り、同年八月に高崎歩兵第十五連隊にて担当者から木の箱を受け取った。箱の中は木片で遺骨は全くなかった。その日の昼頃家に戻ると、村葬ではなかったが、区長はじめ村人三〇名くらいが集まって、地元の高土原神社で焼香してくれた。二、三日後にあらためて自宅で仏式の葬儀を行った。位牌とともに夫の靴下やシャツ、戦闘帽などを「奈良家之墓」に埋葬した。この時は夫のための墓石はとくに建てなかったが、昭和四二年八月三〇日に叙勲を記念して富士見村が建立してくれた。戦死の状況について「どうなっていたのか知りたかったが、何の情報もなかった」という。また虫の知らせもなかった。ただ夫の死から一年間ほどは、夜になると人の足音が気になり、もしかすると帰ってきたのではないかと思いついて飛び起きたこともあった。今から二、三年前に夫が帰ってきた夢を見た。「おまえ何をしているんだ」と話しかけてきた。「今、父（義父）の葬儀で忙しい」と答えると、「おやじも死んだか」といつて目がさめたという。つやさんは「なぜ夫は死ななければならなかったのか、何度も考えた。親戚の者はみな帰ってきたのに、どうして夫だけがという思いがあった。もしかするとどこかで生きていないか、帰って来るのではないかと思いついた。子供（昭和一八年生まれ）が働くようになってから、ようやく気持ちの整理ができて、最近夫のことを諦めた」という。

これらの事例により、第一に、〈事例1〉の小林智慧さんのような戦争初期の戦死の場合には、遺骨の帰還が可能で葬儀も可能であり、その戦死も名誉の戦死として位置付けられていたのに対して、〈事例2〉の大櫛ツエさん、〈事例3〉の熊谷文子さん、〈事例4〉の奈良つやさんのような戦争末期の戦死の場合には、遺骨の帰還は不可能であり、夫の死を受け止め、納得するまで多くの時間が必要であったことがわかる。

そして、第二に、遺骨のない葬儀に対する公・私のギャップが注目される。他人は戦死の公報や空の木箱だけでも葬儀を行えるが、遺族の場合にはそれだけでは真に意味ある葬儀を行ったことにはなっていないのである。高崎歩兵第十五連隊で担当者から木片の入った木の箱を受け取った〈事例4〉の奈良つやさんが「遺骨は全くない」と述べ、その後も「もしかすると帰ってきたのではないか」と思いついたというところである。伝統的な葬送の方式としても死の受容と葬儀には、本人の遺体確認が必要である。事故死の場合には、遺骨返送、少なくとも本人の身につけていた衣類や持ち物などの形見が必要であるというのがその特徴である。戦死の場合には、遺族にとっては具体的な物を媒介としなければ死を納得し、受容することが困難であったことがわかる。このような遺骨のない戦死者の葬儀における遺族の対応からは、葬送の儀礼とは死を受容するための手続きであり、そのためには具体的な死者を表象する物が必要不可欠であることがよくわかる。²⁰⁾

戦没兵士の妻たちが夫の死を受容しようとするきっかけについては、〈事例2〉の熊谷文子さんの例が注目される。熊谷さんは一九四六年に公報が入ってから夫が死んだことが認められなかったが、一九七一年になつてはじめて夫が戦死したサイパン島に行き、きれいな海を眺めた時に、ここで眠っているのかなと感じることができたという。夫が戦死したとされる場所に近い洞窟には、当時まだ遺骨が散乱しており、小さな骨をマッチ箱に入れて持ち帰った。その後も、サイパンに行くたびに

骨片を拾って持ち帰ったという。この例では、戦地訪問の機会を得て、夫が最期にいた場所に立つことで夫の死が受容されていたことがわかる。

前述したようにこのたびの博物館資料調査の調査項目を準備する段階で、筆者自身も戦没兵士の妻への聞き取り調査を何度か行ったが、それでも夫の死の受容に多くの時間がかかっている多くの妻たちに出会った。岩手県北上市に住む菅沼ワカさん（大正五年（一九一六）生まれ）の例を紹介しよう。

ワカさんの夫義平氏は三度の応召の末、一九四五年二月一日にルソン島において戦死した。当時三四歳で、海上挺進基地第二大隊陸軍伍長であった。義平氏の戦死の公報が入ったのは戦後の昭和二年（一九四七）二月二三日のことであった。ワカさんが盛岡へ義平氏の遺骨を受け取りに行ったが、白木の箱の中には木片と紙片が入っていただけで、遺骨はなかった。この白木の箱に対して葬儀が営まれた後、木片と紙片は菅沼家の墓地に建てられている石塔「先祖代々之墓」に納められた。しかし、ワカさんは夫が死んだとは思えないので役場の遺族会で調べる、いわゆる問い合わせを行った。義平氏の死を直接確認した人はいなかったため、ワカさんは「義平が死んだのをみた人はいない」「死んだとは思えない」「よその人は（義平は）死んだ、死んだというが、信じたくない」という思いでいつづけた。

そのワカさんが一九七七年、義平氏の三十三回忌を機に墓石を建立した。この年にワカさんが夫の墓を作ったのはこの時ワカさんも六一歳で、自分の残りの人生を考えるようになっていた。それまでワカさんは一人だけで夫の死を受け入れられない状態を引きずってきたが、それを一度断ち切って、墓を作ることによってあらためて死者を自分の心になぎとめようとしたといえる。この場合、前著でも指摘したとおり、死

者と生者との「切断と接合の装置」として墓石建立が決断されたものと考えられる。つまり、ワカさんは自分自身に残された時間を考え、老いを自覚した時に夫、義平氏の存在をその墓を作ることによって示し、あらためて供養するというかたちを選択したものと考えられる。

（3）語りの閉鎖的傾向性―記憶の個人化・内面化

このように帰還兵士の場合と遺族の場合とを比較してみると、帰還兵士の場合には戦友の死の体験が直接的であったのに対し、遺族の場合は、それが間接的であった点が大きく異なる。死の確認から出発する帰還兵士に対し、死の未確認から出発する遺族という点で対照的である。前者の場合は、自己投影した戦死者に対する供養に集中することができ、後者の場合は、死の確認への欲求と未確認なままでの供養という中途半端な状態が長く継続することになる。そして、死と隣り合わせの体験をした兵士と死の確認ができないままに待たされ続ける遺族のいずれにも共通しているのは「体験した人にしかわからない」という「戦争と死」をめぐる記憶の個人化、内面化という傾向性である。兵士にとってはあの戦友の死の瞬間、未亡人にとってはいつか帰ってくるかもしれないあの出征時の夫の顔、それをひとり思い描きながらも他人には話せない長い戦後の生活、それはまさに「体験した人にしかわからない」体験となってしまうのである。

広島市の被爆者の語り 同様に、戦争による一般市民の犠牲についても、たとえば広島市の被爆者への聞き取り調査を継続している直野章子がやはり「遭ったものにしかわからない」という言葉に何度も出会うと書いている。広島市の被爆者の場合の「戦争と死」の記憶においても閉鎖性が指摘されているのである。また、その被爆者たちの語りが、一方では、一九五四年の第五福竜丸水爆被災事件（ビキニ事件）後の、原水爆禁止運動を契機として社会的な場で注目されるようになり、やがて「核兵器

廃絶と世界恒久平和への願い」に「ヒロシマの心」が定型化されるにいたったという。⁽²³⁾

被爆者たちが自分の体験を語り始めた動機として注目されるのは、第一にはこのような社会的運動を背景にしたものがあるがそれとは別に、もう一方、第二には、個々人の内発的動機によって、死者のために語り始めるというのがある。そして、それが次第に、「死者の気持ちが変わるようになって」くる、感情的に深化していく例が注目される。米山リサによれば「生き残った人々の多くにとって、証言の実践とは、死者の消えゆく声と感情を表現しようとする試みであり、瞬時になされた大量虐殺によって沈黙させられた者たちの最後の感情と思考を伝えようとするものである。生き残った者は、それを、死者と同一化し、死者の発話を聴き手が理解できる言葉に換えて行方。死者のための、語りが死者の語り姿を変えるそのとき、非同一化のクリティカルなプロセスは、たしかに停止することになる」という。⁽²⁵⁾

ここで指摘できるのは、元兵士や遺族の場合には「同じ体験をした人にかかわらない」という閉鎖的傾向性を持ちながら、その記憶は風化と喪失に向かうのに対して、一方広島市の被爆者の場合には「同じ体験をした人にかかわらない」という閉鎖的傾向性を持ちながらも、社会的な原水爆禁止運動に連動して、あるいは個人の内面的変化をきっかけにして、積極的に体験を語るようになると、そこからさらに「核兵器廃絶と世界恒久平和への願い」や「死者の気持ちの代弁」というような、感情発信と運動・アピールへ、と大きく変化していく傾向が認められるという点である。

③ フランスの二つの事例より

(1) グエヌウの虐殺とコウメモラシオン(追悼行事)

ペンクエレックの八七虐殺 フランス、ブルターニュ地方の、軍港で有名な都市ブレストの北方約七キロメートルにグエヌウ(Gouesnou)という町がある。このグエヌウでドイツ軍によって一般市民四二人の大量虐殺が行われたのは一九四四年八月七日のことである。第二次大戦末期、一九四四年六月の連合国軍によるノルマンディー上陸作戦の後、ドイツ軍はブルターニュ地方においてその拠点としていたロリアンやブレストを引き上げるをえなくなっていた。ちょうどその時期、八月七日、グエヌウの教会の尖塔でドイツ兵がアメリカ軍のパラシュート部隊の降下を見張っていたところ、何者かによって銃撃された。ドイツ兵は銃撃したのはレジスタンスによるものと思い、ただちにブレストからドイツ軍がグエヌウにやって来て、町を歩いてきた一般市民を次々と捕まえていった。ブレスト近郊ではグエヌウのほかにも近隣のギパヴァなどで十名程度の虐殺が行われていたが、グエヌウの虐殺は大規模だった。一六歳から七一歳までの名前不明者九名を含む老若男女四二人が教会に集められ、その後、村はずれのペンクエレック(Penguerec)という地名の場所の、農家の小屋まで連行されて、そこで全員銃殺され、その後小屋ごと焼却された。

八七追悼行事 現在、この町では毎年その八月七日にコウメモラシオン (la commémoration) と呼ばれる追悼行事が行われている。⁽²⁶⁾

筆者たちが参加した二〇〇四年は虐殺から六十周年の年であった。教会でのミサでは唯一の生存者である Yvette PHELLEP さん(当時一五歳)がローマ法王ヨハネ・パウロ二世の手紙から、平和に関する手紙の



一部を抜粋し、「赦し」(pardon) について読み上げた。その後、教会内に犠牲者追悼のラッパが吹き鳴らされた。ミサの後、教会の敷地内に設けられている聖女アンヌを奉獻したシャペルの外側に第一次大戦後に建立された戦争犠牲者記念碑の前で、市長による献花と黙祷が捧げられた。このモニュメントには、第一次大戦の犠牲者と第二次大戦の犠牲者、一九四四年八月七日にペンゲレックで銃殺された三三人の名前と年齢および不明者九人 (NOONN) と表示) の合計四二人の犠牲者の名前が刻まれている。このような戦争犠牲者の名前を刻んだモニュメントは、大量の犠牲者がた第一次大戦後、一九一九〜一九二二年の間にフランス政府によって各町村ごとに建造されたものである⁽²⁷⁾。

そして在郷軍人会の人たちが先頭になり、虐殺された四二人の人たちがかつて連行された道(思い出の道・chemine de souvenir)を行進して、ペンゲレックの記念碑へと向かった。そして、そこに建てられているモニュメントの前で、愛国のセレモニー(ceremonie patriotique)とも呼ばれるコウモラシオンの式典が行われた。それは市長による献花と追悼の言葉、楽隊による国歌ラ・マルセイエーズの演奏、犠牲者一人一人の名前が読み上げられながらの子供たちによるバラの花一本ずつの献花、市長のあいさつ、子供による平和への宣誓、



ベンゲレックの虐殺現場



グエヌウ。コムモラシオン(2004年8月7日)
シャベルの壁には犠牲者の名前が刻まれている



ベンゲレックでの虐殺の記憶の
共有と確認の儀礼 市長の挨拶



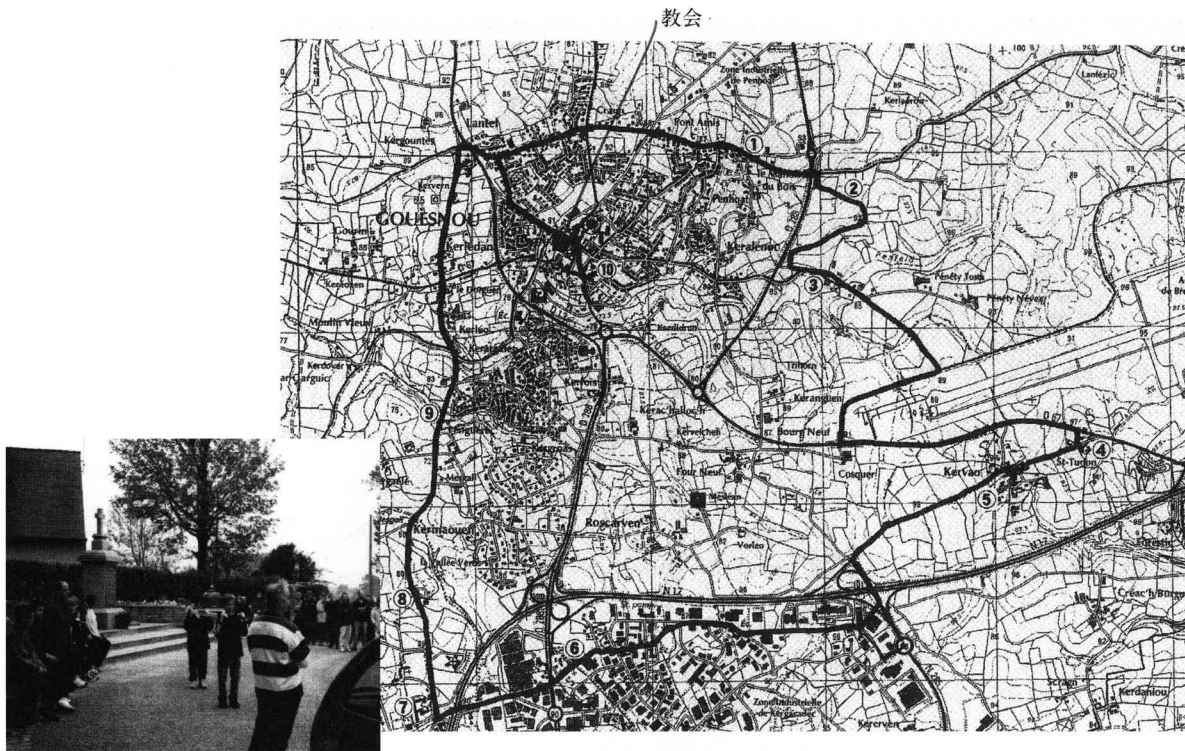
42人の市民が連行された教会から
ベンゲレックへの道を行進

などであった。

市長のあいさつの概要は次のようである。「一九四四年八月七日、罪のない人がここで命を落とした。ばかげた愚かな(きちがいじみた)行為を記憶するために、共感を表すために、野蛮な行為に「ノン」というために(中略)この六十周年にあたって若い人たちの参加を促したのは彼らの死をむだにしないためである。若者は我々の歴史の記憶に刻んでもらうために平和を打ち立てていく、これからのヨーロッパを建設していく者であるから」。

ここでは、ナチスドイツへの怨念に全く触れず、「戦争という愚かな行為を記憶するためにこの行事を行う」、そして「平和なヨーロッパを築いていく若者の参加を促した」というもので、犠牲者の死をむだにしない、戦争という愚行を起こさない、平和を建設する、という三つの要点からなっている。これは虐殺の翌年、一九四五年から始まった行事で、怒りや怨みからやがてその克服と協調へという時代による変化が認められるものの、毎年八月七日には、戦争という愚かな行為に対する記憶の共有化と平和の構築への誓いが繰り返し行われているのである。このコムモラシオンはまさに儀式的措置を通じて戦争への回帰を防止するための共同行為となっておりといつてよい。ベンゲレックのモニュメントには *souvenir* (覚えておく) という文字が象徴的に刻まれているが、この *souvenir* にこめられている重要なメッセージとは、単に犠牲者一人一人を覚えておくことにとどまらず、その事件をさらに戦争という愚かな行為を記憶しておく、という意味をもっていることがわかる。

伝統行事トロメニへの組み込み このグエヌウは、トロメニ (*troménie*) と呼ばれる伝統行事を伝えている町でもある。毎年、復活祭後四十日目のキリスト昇天祭 (*Ascension*) に、町の人たちが教会から十字架と聖人グエヌウの聖遺骨を入れた輿を担いで、町の周囲約一八キロメートルをプロセシオン (行進) して教会に戻るのである。これはキリスト教的



トロメニ (聖人グエヌウの聖遺骨が納められた奥が町を巡回する伝統行事)のスタシオン／⑨ペンゲレック。祈りが捧げられる。(2002年5月9日)
グエヌウのトロメニの巡路(①～⑩がスタシオン)(⑨ペンゲレック)
(新谷尚紀・関沢まゆみ『フルターニウのパンドル祭り-日本民俗学のフランス調査-』悠書館 2008年 155ページより)

な性格を有する伝統的な宗教行事である。グエヌウの町の領域と境界は七世紀、ウエールズから来た隠修士グエヌウが定めたものと言い伝えられている。グエヌウは領主から一日で囲めるだけの領地をあげようといわれて、干草用のフォーク型の農具で土地にしるしをつけながら歩いた。グエヌウがしるしをつけるとその両脇の土地が盛り上がりつつ境界ができたという。この伝説にしたがって人々は毎年一度聖人グエヌウが歩いた境界の道をたどるのである。

グエヌウではそのトロメニのプロセシオンの順路中、計十カ所のスタシオン (station) と呼ばれる休憩祭壇が設けられている。シャペルの跡地や聖人グエヌウが座ったという大きな石の椅子、村外れに位置するカルヴェールと呼ばれる十字架など、主に信仰に由来する地点であり、その各スタシオンにおいてテキストが読み上げられ、讃美歌と祈りが捧げられる。

この虐殺の地であるペンゲレックは一九四五年から新たに、第九番目のスタシオンとして人々が祈りを捧げる場所とされた。二〇〇二年の筆者たちのトロメニの調査では、このスタシオンでは、モニュメントの前に聖人グエヌウの聖遺骨を入れた奥が安置され、一九四四年八月七日に虐殺が行われたことと戦争と平和についてのテキストが読まれた。このトロメニに参加した町の人々のなかには犠牲者の兄弟姉妹や親戚の者が大勢いた。しかし、人々にとって過去の虐殺はすでに終わっていることという意識が強いためドイツに対する怨みには触れず、この二〇〇二年当時進行していたイスラエルとパレスチナの紛争とその犠牲となっている市民への思いやキリスト教の迫害についてなどが語られた。

グエヌウの人々はこうして毎年二回、八月七日のコウメモラシオンの日と五月か六月にやってくるキリスト昇天祭の日に行われるトロメニで、ペンゲレックの虐殺の現場に集会し、戦争と虐殺という愚行の記憶の再確認とその記憶の次世代への継承とを行っている。注目されるの

は、第一に、八月七日のコウメモラシオンにおいて、かつて犠牲者が集められ連行された、教会からペングエレクトクへの道を行進し、その日の儀礼的再現、追体験を行っていることである。そして第二に、虐殺現場とそこに建てられたモニュメントがトロメニという伝統的な宗教行事のなかに組み込まれているという点である。このような伝統行事への組み込みによって、ペングエレクトクの記憶は繰り返し人々に伝えられていくことになる。新しい儀礼の創出と伝統行事の継承、この両者は、前者は後者に組み込まれながら、後者は前者を組み込みながら、地域社会において強力な伝承力を獲得していることがここに指摘できる。

(2) オラドゥール・スール・グラヌの虐殺と語り

虐殺の町 フランス中部の都市リモージュの西方に、オラドゥール・スール・グラヌという小さな町がある。リモージュとサン・ジュニエンをつなぐトラン（路面電車）の駅を中心にカフェや床屋、三つの学校がある町であった。

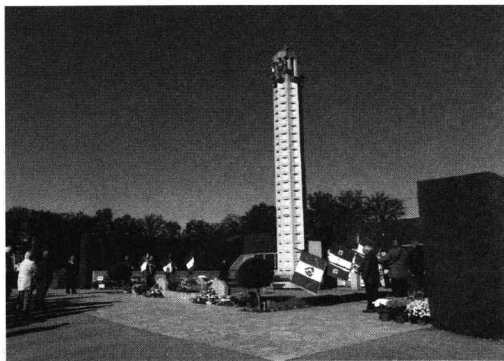
一九四四年六月一日、ナチス親衛隊SSによって、町にいた老若男女六四二人（男性一七七人、女性二四〇人、子供二〇五人）全員が虐殺され、町全体が焼き払われた。この日は土曜日で、SSにより、アイデンティティ検査を行うから午後二時に町の中心にある広場に全員集まるようにいわれた。そこで、町の人が全員集まると、男性は六つのグループに分けられてそれぞれ納屋に連れて行かれ、女性と子供は町外れにある教会に連れて行かれた。そこで、銃殺が行われ、その後火がつけられて焼き殺されたのである。この時、五人の男性が納屋から脱出することに成功し、一人の女性が教会の窓から飛び降りて逃げることでできた。生存者はこの六人だけであった。

オラドゥール・スール・グラヌの虐殺後、SSは死者の名前がわからないように大きな墓穴を三カ所に掘って埋められるだけ遺体を埋め、他

は教会内などに焼かれた遺体を放置した。そのため、SSが撤退した後には名前が判明したのはわずか五二人だけで、名前がわからない遺体が多かったため葬式を執り行うことができなかった。そこで、村全体を墓地として残すことになったのである。

虐殺後、ドイツ軍は撤退し、九月にはリモージュで調査が開始され、またその九月と一〇月にはニュース映画が作成されて人々の関心をひき、一月二八日に村が国の歴史的遺跡に指定された。そして、その廃墟の保存とその西北に新しいオラドゥール・スール・グラヌの町の再建が決められ、一九四七年六月一日、オリオール大統領は新しいオラドゥール・スール・グラヌを建設するための礎石を置いた。政府は犠牲者の遺族会に、この村の家の屋根や壁、シャッターを灰色にするように強制した。他の色は一切認められなかった。政府は、村の再建を戦後の再建のモデルでありシンボルにしようとしたのである。

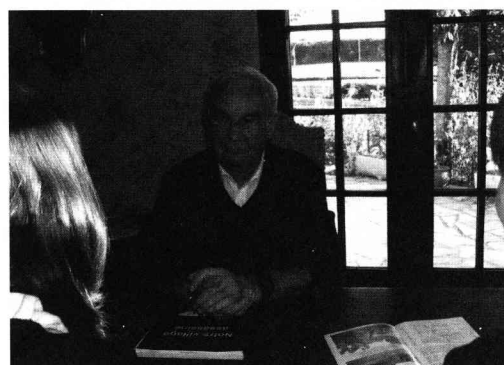
一九五三年のボルドーでの裁判では、虐殺に関与したSSの二人の被告の内、七人がドイツ人で一人がアルザス出身のフランス人であったことが明らかとなり、その判決は死刑や強制労働、投獄という厳しいものであったが、すぐに全員に特赦が認められた。国家統一の名目のためにアルザス人に対して特赦がなされたことに対して、オラドゥール・スール・グラヌの人々は犠牲者の尊厳を傷つけられたとして怒り、強制的に「SSに入らされた」と主張するアルザス人との関係が悪くなり複雑な問題を残した。オラドゥール・スール・グラヌの人々は「特赦を決めた人を覚えておく」と書いて、後のミッテラン大統領などその関係者の政治家たちのリストと、虐殺を行った一三人のリストを掲示した。また判決に反対した遺族は一九四五年三月にドゴール將軍がオラドゥール・スール・グラヌを訪れたときに「野蛮なドイツ人」(BARBARIE ALLEMANDE)と記した記念碑を寄贈されたがそれをリモージュ市に返却し、政府が建設した教会（記念館）に死者の遺骨を移すことを拒否



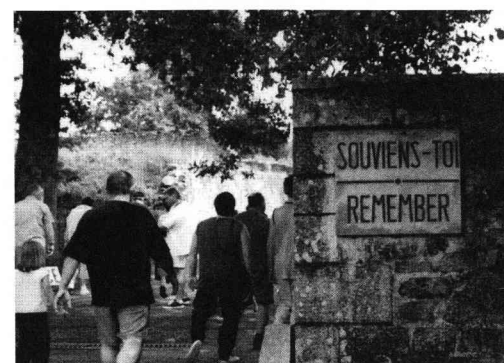
犠牲者の墓地での追悼儀礼 (2006年11月2日・死者の日)



カプセル内は 642 人の犠牲者の遺骨と遺灰



ロベール・エブラスさん (2006年11月)

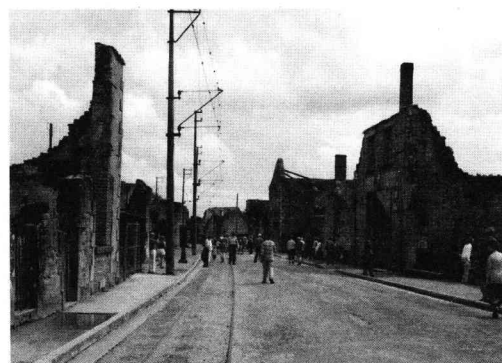


現在の遺跡の入口

事件後、1944年9月に、Jean Dieuzaideというカメラマンがトゥールーズから来た。彼はドイツ人が去った村の写真を撮影していた。オラドゥール・スール・グラヌで17枚の写真を撮った。すでに「SOUVIENS-TOI」と書かれた木のプレートも写されていた。



事件前のオラドゥール・スール・グラヌ



遺跡として残された町 (2004年8月撮影)



人々が集められた広場に残る自動車



焼かれた家の跡。ミシンなどが見える。

した。そうして遺族はフランス政府とは一九七四年まで断交状態となった。

政府の援助を受けずに、遺族は六四二人の犠牲者の灰を収めるために村外れの墓地の奥に「犠牲者の墓地」(TOMBEAU DES 642 VICTIMES DU MASSACRE)を建設した。周囲には犠牲者の名前を刻んだプレートが配置され、中央にはこの地方の伝統的な墓地の装置である「死者の火」(Lanterne des morts)の塔をイメー²⁹ジして建てられた象徴的な塔と、その両脇に犠牲者の遺骨をおさめた透明のカプセルが置かれている。

一九七四年、ボンピドゥー大統領の時代にオラドゥール・スール・グラヌと政府との関係が回復した。なくなった村の記憶を残すために、Sの略奪後に焼け跡に残されていた遺物を保管する場所として先に建設されていた教会(記念館)が開館された。その後、一九八九年、ミッテラン大統領のときに資料館の建設が計画され、一九九二年に建設が始まった。そして、一九九九年七月、シラク大統領のときに資料館は開館を迎えた。

各地での虐殺 この虐殺の前、一九四四年六月にテュール(Tulle)とリモージュに八、五〇〇〜九、〇〇〇人のナチス親衛隊SSが移動してきていた。しかし、オラドゥール・スール・グラヌは田舎の村で九〇パーセントの人はドイツ人を見たことすらなかった。SSが村の周りに来て、人々が広場に集まるように言われても誰も何の心配もしていなかったという。ただ、ロレーヌ地方など先にドイツ兵の被害にあった他の地方から疎開してきていた人の中には両親からドイツ兵を見たら逃げなさいと教えられていた子供もいた。

オラドゥール・スール・グラヌがSSに狙われた理由として、ここから約一〇キロメートルのところサン・ジュニエンという小さな町があるが、その町で起こった二つの事件との関連が指摘されている。前日九

日にサン・ジュニエンにSSの第三団《Der Führer》連隊が野営をしていた。その二日前、七日にレジスタンスがサン・ジュニエンの鉄橋を爆破した。これはドイツ軍がノルマンディの地に行くのを遅らせようとしたからである(連合軍のノルマンディ上陸は一九四四年六月六日)。その間に二人のドイツ兵が殺された。

さらにもう一点付け加えるならば、この虐殺を直接指示したディックマン大尉の個人的な友達が、リモージュの東、オラドゥール・スール・グラヌから約六〇キロメートルのところのサン・レオナルド・ドゥ・ノブラ(St-Leonard-de-Noblat)という村のレジスタンスによって捕虜にされていた。このような事件がディックマン大尉に、一般市民の虐殺によるレジスタンスへの見せしめを決断させたのだともいわれている。一〇日にサン・ジュニエンのステーションホテルに作られた司令所に、ディックマン大尉がクレイス中尉と四つの市民軍を呼び出し、オラドゥール・スール・グラヌを破壊する計画を伝えたのである。

リムーザン地方ではSSによる虐殺が頻発していたが、前日の九日にはテュールで九九人が首吊りで殺され、三六〇人が強制収容所に送られていた。これもディックマン大尉の指揮によるものであった。ほかにもマルスラ(Margulas)で、やはりオラドゥール・スール・グラヌと同じ六月一〇日に二八人が虐殺された。ほかにもヴァリュエ(Varioux)とラ・シャペロン・ヴェルコール(La Chapelle-en-Vercors)では、七月二日からドイツ人による虐殺が行われた。このように各地でSSによる虐殺が行われたが、オラドゥール・スール・グラヌの虐殺は最大規模のものであった。

生存者の語り―事実しか語らない― この虐殺の時、奇跡的に五人の男性と一人の女性が逃げることができた。その生存者の一人、ロベール・エブラスさん Robert Hebras (一九二五年生まれ)は事件当時一九歳であった。二〇〇六年十一月、私はエブラスさんに直接話を聞くことがで

きた。

エブラスさんは事件後しばらくは、自分が生存者になったのが恥ずかしかったため事件の話は決してしなかったという。結婚し、新しいオラドゥール・スール・グラスヌの町に住むようになり、日常生活に戻っても、話したくないことだった。しかし、一九五三年のボルドーの裁判では証人として体験した事実を証言した。また、オラドゥール・スール・グラスヌを舞台にした映画や小説が作られていく中でやはりそれらのようなフィクションでなく事実を伝えなければならないという気持ちになっただけだった。その後、年齢を重ねるにしたがい、生存者が少なくなり、とくにジャーナリストのインタビュウに対しては決して話さなかった唯一の女性の生存者マルグリット・ルフアンシュさん (Margurite Rouffanche) が亡くなったのがきっかけとなって、彼女がエブラスさんにだけは話していたことを書き残しておかなければならないという気持ちになり、一九九〇年頃、二年かけて事件の日のことを書いた。それが『Oradour-sur-Glane: The Tragedy Hour by hour』 Les Chemins de la Mémoire Editeur (三十二ページ) という本である。⁽⁸⁾

エブラスさんにインタビュウを始めるとき、最初に彼は私たちに「自分の経験だけ」をできるだけ話す、と言った。以下は、エブラスさんの先の手記とインタビュウの時の記録による情報である。

一九四四年六月二〇日(土) エブラスさんは当時リモージュのガレージの修理工だった。八日(木)に職場の親方が、ドイツ軍のオフィサー(士官)と鋭い言葉のやり取りをした。彼は立ち去りながら、いくつかの脅迫をした。親方は正しかった。親方はエブラスさんたち若者三人が強制労働に徴集されるよりもガレージを去ることを望んだ。それで翌日九日(金)にオラドゥール・スール・グラスヌに帰った。

事件の日、父親はサン・ヴィクチュニエンに徴集のための牛を連れて行く農夫を手伝いに行っていて、帰りは午後遅い予定であった。姉は昼

食の支度を手伝っていた。彼女はリモージュで看護婦をしていたが、リモージュに爆弾が投下されるかもしれないといううわさがあったため、オラドゥール・スール・グラスヌに帰ってきていた。妹は昼ごろ一度学校から帰って、お昼と一緒に食べた。

昼過ぎ、友達のマーシャルがよびにきた。少し後で、村の低いところからエンジンの音が聞こえてきた。マーシャルは驚いた様子だった。彼はドイツ兵を恐れていたため、すぐに逃げた。それで彼は助かった。六台のトラックが村はずれに止められ、兵士たちが降りてきていた。

以下は、土曜日の午後、この村で起こったことをエブラスさんの手記から記す。

午後二時一五分

マーシャルが去った後、私は家に帰って、母と姉にドイツ人が村にきているのか、外に出てみた。すでに人々は窓やドアのところにいてこの理由を知りたがっていた。

母は私に通りに行かずに家の後ろに隠れるように言った。私は私の書類は完全で、アイデンティティチェックを拒む理由はないと答えた。アイデンティティ検査というのは人々を警戒させないためにSSによって与えられた口実だったのだが。

一人の兵士が来て、他の人たちと通りに集まるように言った。

そして広場に集まると、装甲車が来て、民間人、老人、周辺の農村部の人々をおろした。そして去って、しばらくするとまた新しい人々をのせてきた。

兵士たちは広場を囲み、私たちに機関銃を向けたが、集まった人々は誰も驚かなかつた。まだ戦争中だったから。徒歩や装甲車で少なくとも六〇〇人が集められていたと思う。

午後二時三〇分

他のSSが村の学校に行き、先生に子供たちを広場につれてくるように言った。子供たちは恐がらずに行った。逃げるのに成功したのは、ロジェ・ゴフリン Roger Godrin（八歳）だけだった。彼は一九四〇年の終わりに両親とともに、ドイツ人にロレーヌ地方のシャリー Charly 村を追放されてオラドゥール・スール・グラヌにきた。一時間のうちに三〇キログラムの荷物を作って立ち去るように言われた。そしてドイツ人は彼の家に「良い忠実な市民」という称号を与えた。ロジェの一家はエブラスさんの家の隣の小さな家に引っ越してきた。私たちは親しい付き合いをし、いつも助け合った。私はゴフリンの母親が息子に「ドイツ人を見たら逃げなさい」と何度もいつているのを聞いた。すでに戦争で試されたこの家族は、ドイツ人がオラドゥール・スール・グラヌに来るかもしれないと予想していた。そして、ドイツ人がきたら、彼らは墓地の後ろの森に逃げていつて落ちあうことに決めていたが、両親は逃げられなかった。

この日はタバコの配給日だったので、近隣の村からタバコ屋に来ていた人も群集のなかにいた。装甲車が村を包囲し、兵士が人々に銃口を向けていたにも関わらず、本当に誰も心配をしていなかった。フランスは占領下にあつたにも関わらず、オラドゥール・スール・グラヌはいつも闘争の外にいた。それまでオラドゥール・スール・グラヌの人々は、普通の戦争の不自由や占領の圧力にあまり苦しむことがなかったからである。

午後三時三〇分

同じ士官が前に出て、静かにするように、立って、壁に向かって三列になるように命令した。人数が同じでない六つのグループに分けられた。エブラスさんは約六〇人のグループにいた。各グループは北の方向や南の方向に移動した。村の比較的大きな納屋やガレージなどの建物が六つ選ばれていた。それらはデニのワインとウイスキーの店、ボリュエの車

庫、ロデイの納屋、ミロードの納屋、ブクルの納屋、デゾトーのガレージである。エブラスさんは、彼らが調査をする間いくつかの納屋に男性を連れて行くのだと思った。それで、誰も逃げようとしなかった。

エブラスさんはロデイの納屋に行った。大きな建物で、カートや干草の棚があつた。荷馬車を外に出した。二人の兵士が箒で床を掃いた。何人かの若者が干草の上に座っていると、一人のSSが来て、立つように言った。そして私たちは一緒に集まった。いろいろな会話が終わった。

私たちの前に置かれた機関銃の後ろに二人の兵士が立った。他の二人も首に弾薬のベルトをまいてそばに立った。士官は私たちから目を離さなかった。

暑かつた。時間が刻々と過ぎ、心配が大きくなってきた。村全体の調査に長い時間がかかるのだろうと思つた。皆同じことを考えていると思つた。誰もしゃべらなかつた。

午後四時

突然私は爆発の音を聞いた。たぶん手榴弾である。これを合図に、機関銃の後ろの男たちが位置について撃つた。耳をつんざくような音と火薬の臭いとで、すべての男は倒れた。他人の上に重なつた。痛みの叫びと熱と干草に血がまじつた臭い、埃、粉が、納屋を地獄に変えた。私は何が起こっているのかわからなかつた。

全てがとても早くおこり、銃が静かになつた時、取り乱した体の山からは泣き叫ぶ声やうめき声などが起こつた。私は何人かの他人の下になつていた。のどが渴いていた。もし傷ついていたらともわからなかつた。私に熱くてべとべととしたしずくを手に感じた。私はとっさに死んだように動かず横たわつた。私は足音を聞いた。彼らは生存者がいないか確かめるように私たちの体をはうように進んだ。私は背中を足を感じたが、たじろがなかつた。

友人の一人が私の脚に頭をのせてよこたわつていた。彼は死んでいた。

弾丸が私をかすった。私ははるか遠くに痛みを感じた。私は急に恐くなり、とてものがかわき、傷も痛み始めた。兵士たちは干草や燃やすための木で私たちを覆い、火をつけた。私だけが生きているのか？ 納屋から、M. ダルトゥ (Marcel Darhoul)、Y. ロビイ (Yvon Roby)、C. ブルンディ (Clement Broussaudie)、M. ボリー (Mathieu Baorie) の四人が先に逃げ出した。

午後五時

同時に全ての男性が殺されたが、六つの死刑場からたった五人だけが逃げる事ができた。彼らはすべてロディの納屋からだった。ほとんどの人は足を撃たれていたにちがいない。そのため逃げる事ができずに火によって残酷に殺されたことは疑いない。

処刑が終わると、人狩が始まった。目撃者を撃つのである。後に遺体が村中から見つけられた。農家の井戸の中やパン屋のオーブンの中から遺体が発見された。

命令は村の抹消を計算していたのか？ 私たちはわからない。しかし家も建物も全て焼かれた。第一段階が終わると、残忍な殺し屋たちは第二段階の仕事にとりかかったのである。

教会内の出来事

その時、エラプスさんは男性だけが殺されたと思っていた。女性や子供には、男性が殺されるところをみせないようにしたのだと思っていた。しかし、教会に連れて行かれた女性も子供も同じように銃殺の後、爆薬で殺されていた。

ルファンシユの証言である。彼女は教会から生きて出られたただ一人の人である。私は彼女と何度も悲劇的事件について話した。彼女は最も少ない説明に脚色することはなかった。教会は彼女がすべてを見るには人が多すぎた。私は真実に同じ尊敬をもって、彼女の証言をすべて話す。

《一九四四年六月一〇日二時頃、ドイツ兵が私の家に入ってきて、私に広場にいくように命じた。私は夫と息子、二人の娘、私の男の子の孫といっしょに行った。広場ではドイツ兵が女性と子供、それと男性を分けた。最初のグループに私はいたが、私たちは武装された護衛のもとで教会に行った。母親たちは赤ちゃんを腕に抱いたり、ベビーカーを押しながら教会に入った。生徒たちも同じだった。数百人がいた。

教会に詰め込まれて、私たちは次に何がおこるか知りたいと強く思いながら待った。四時頃、二、三人の二十歳代の兵士が聖歌隊席に近い、ネーヴ (教会堂の身廊) に、大きな箱を持ってきた。ひもが下がっていて、地面をひきずってきた。

ひきずる紐に火がつけられたとき、爆弾が突然大きな音をたてて爆発した。窒息させるような厚い黒い煙が出た。女性と子供たちは息を詰まらせ、金切り声をあげながら、空気がまだ新鮮なところに急いで行った。恐怖でいっぱいの人々の抵抗できないプレッシャーのもとで聖具保管室のドアは壊された。私は彼女たちについていき、階段に座った。私の娘がやってきた。ドイツ兵は私たちが部屋に逃げたのを見て、そこに隠れていた全員を冷酷に銃で撃った。娘は立った時に外からの銃弾によって殺された。私は目を閉じて死んだふりをして命をまかせた。一斉射撃が行われ、それから敷石に横たわっている人々の身体の山に藁やまき、椅子が投げられた。

私は無傷で虐殺を逃れていた。私がいいた主祭壇の後ろには煙もこなかった。教会のその部分には三つの窓があった。私は中央の窓に行った。一番大きい窓で、キャンドルに火を灯すときに用いられる椅子があった。私はその窓にのぼろうとした。私はどうやったのかわからない。しかし、恐怖が私を強くした。私は出来る限り自分自身を持ち上げた。そして壊れた窓ガラスをぬけて約十フィート下に落ちた。

見上げると、私の後に赤ちゃんを抱いた女性が續いていたのを知った。

彼女は私の隣に落ちた。赤ちゃんが泣くと、ドイツ兵は私たちを撃った。母親と赤ちゃんは殺された。私は傷をうけて、近くの庭にはっていった。私はさやえんどうの畑に身を隠した。そして恐怖の中で翌日の朝五時までじっとしていた。》

ルファンシユは、一番小さい子供は生まれてからたった一週間の赤ちゃんで、罪のない子供たちが猛猛に虐殺されたことを証言している。

以下は、今回のインタビューによるエブラスさんの村を離れた後の話である。

七時頃になってエブラスさんは村を離れた。振り返って村をみると、焼けていて、屋根が落ちていた。エブラスさんは納屋に入れられても理由なしに誰かを殺すなんて想像できなかった。しかし爆発が聞こえるとすぐに銃で殺された。ロデイの納屋に五〇〜六〇人の男性がいた。エブラスさんは死んだ人の下になったので助かった。SSは火をつけた。火がついた時、死ぬか、逃げるか、撃たれるか、だった。兵士が少し離れたところにいたのでエブラスさんは逃げられた。中庭のうさぎ小屋やいろいろな所に隠れながら広場を渡って墓地に着いた。同じ納屋から六人が逃げた。一人は別方向に走って行ったので見つけられて撃たれた。

エブラスさんは一人で歩いて小さな村に着いた。夜一〇時頃でもう真つ暗だった。ドアをノックして中にいれてもらった。その人は何があったか知らなかった。「男性は皆殺された」と言っても信じてくれなかった。レジスタンスかと思われて、あまりいいお出迎えではなかった。他人の血がついていたし。SSがここまでくるかと思うと、皆、恐くなってしまった。

翌日、エブラスさんは他に行くところがなかったから、オラドゥール・スール・グラヌの東八キロメートルのところにあるル・ポヨル(Le Pouyol)という集落に住む姉を訪ねていった。しかし、そこには父親しかいなかった。父親は一〇日の夜八時頃、自転車でオラドゥール・スール・

ル・グラヌの教会に着くと火事と死体が見えたという。

一〇日の夜、一〇時から一時にSSが村を離れ、一日にSSが再び村に戻ってきて、共同墓穴を三つ作って、誰の死体かわからないように埋めた。そして一二日にSSが村にまた戻ってきた。そして一三日にSSがノルマンディに行ったが、リモージュのSSはまだ残っていた。そして彼らが死体を片付けるようにいろいろな人に頼んだという。

六四二人の犠牲者がいた。そのうち五二の死体だけ名前がわかった。他は骨と灰だけになっていたため名前がわからなかった。「この五二人という数字をよく書いておいてほしい」とエブラスさんは私たちに言った。

「オラドゥール・スール・グラヌは戦争のなかで意味がなかった。オラドゥール・スール・グラヌの住民は悪いことはしていない。とくに女性や子供を教会に閉じ込めて殺すのは犯罪である。女性には男性のようにレジスタンスの可能性はないのだから。自分としては特別なきっかけはなく、ゆっくりと話す気持ちになった。納屋の五人のうちもう二人しか生きていない。だからよく質問される。記憶については、フランスやヨーロッパの人はとても興味がある。アルザス人はドイツ人にSSに入らされたかもしれないが、自分で入った人もいる。入らされた人だけではない。アルザスには歴史の新しい考え方の人が何人もいる。アルザスとの関係は難しい。」

ガイドの解説「自分の意見はいわない」 現在このオラドゥール・スール・グラヌにはその虐殺を紹介する資料館が建設されており、遺跡のガイドが三人いる。私たちは二〇〇四年に続いて二〇〇六年にもこの町を訪れたが、オラドゥール・スール・グラヌに住んで二〇年、ガイドになってまだ一カ月だという一九五九年生まれのガイドの男性と一緒に、一月一日万聖節の日に廃墟の村の入口の扉を開けた。

入口を入ると、ガイドは「一九四四年六月一〇日、この村は一二八

クタールで、約一、五〇〇人が住んでいた。村の人が五〇〇人、ほかにスペインやロレーヌ地方から避難してきた人などが住んでいた。家は三二八軒で、住宅が一二三軒、他は店であった」と当時の村の概観について説明した。そして入口を入ってすぐ右手にある農家の庭に案内すると、そこには木の十字架が立てられ、花が飾られた井戸跡があった。「井戸の中に死体が発見された。外に出せなかったので、井戸を埋めて墓にした。人数は不明。虐殺から三週間後のことである。ドイツ人が去って、やっと村に近づくことができるようになると、周辺の村のほうに住んでいた人や、ボーイスカウト、神父らが助けにきた。井戸に死体があることは、悪臭でわかった。もちろん誰であるかは判別できなかった」。メインストリートを歩きながら「オラドゥール・スール・グラヌはガレージ、パン屋、床屋などがあつてにぎやかな町だった。リモージュからサン・ジュニエンやビュイスイエール・ポワトゥヴァン (Buisserie Poitevine) に行く鉄道もあった。二時にSSが村に入ってきて、七時

には全員が殺され、略奪され、村も焼かれた」。「オラドゥール・スール・グラヌでは、レジスタンスがなかったので、戦闘にならないと思われて狙われた。(別のレジスタンスの村と間違えられたというゴシップ(噂話)もあるが)明らかに準備されていた虐殺である」。広場では「男性と、女性と子供を分け、それから男性は六組に分けられて納屋におくられた。女性と子供は教会に集められた。皆、アイデンティティの検査だと思っていたので、逃げようと思わなかった。SSはパニック状態にしないように、武器を人々の前に置き、床の掃除をした。兵士たちはプロである。四時三〇分に広場でボンと爆発音がした。すると六つの納屋で虐殺が行われた。まず銃で撃ち、それから死体に火をつけるために棚や草などなんでも死体の上においた。教会には四五〇人以上がいた。煙と爆弾で多数が死んだ。それからSSが教会内に入って銃殺した。そして火をつけた。祭壇の後ろに隠れていた女性(当時四三歳)が階段をのぼって窓か

ら逃げた。逃げて、後ろの庭に隠れた。もう一人の女性が赤ちゃんを抱いて、教会の窓から飛び降りた。赤ちゃんが泣いたので、SSにわかってしまつて母親も赤ちゃんも殺された。逃げた女性はリモージュに隠れていて、一週間後にオラドゥールに戻ってきた。SSは生存者が一人いるとわかつたから彼女を探した。子供が学校に行っていたので、心配してきた母親も殺された」。

「六月一〇日(土)に事件があり、一日(日)に一度SSは村を出たが、一二日(月)に戻ってきて、共同墓穴を作つて死体を隠そうとした。しかし、死体が多すぎて教会に放置した」。「SSの中にフランス人もいた。(フランス人がフランス人を虐殺したという意味で)『戦争の悲劇のシンボル』である」。

このようなガイドの解説を聞きながら、村人全員が集められた広場、男たちが入れられた六つの納屋、女性と子供が集められた教会、そして墓地へと案内された。

彼は「数字」と「起こつたこと」しか話さないと言った。そして、それを強調した。虐殺当日の「起こつたこと」の語りの情報源は六人の生存者の話によるものだけだという。三人のガイドは皆、ガイドの時は「自分の意見を言わないように」と言われている。殺された人と生存者のために起こつたことだけを話さなければいけない」と指導されているのだという。その背景には何よりも一九五三年のボルドーでの裁判とその後複雑な問題があるため、一九四四年六月一〇日に起こつたことだけを話すにとどめなければならないという政治的な事情があることはすぐに理解できた。

フランスでは第二次大戦は中学四年生のプログラムに入っているため、生徒に話をする機会が多い。歴史の話がここに来ると具体的になる。しかし、ガイドたちは決してうらみの言葉や、忘れることはよくないなどというメッセージは言わない。起こつたことしか言わない。そして戦

争の悲惨さなどメッセージ的なことは、見学者が自分で気づけばいいことだという。

以上、生存者のエブラスさんの語りにおいても、遺跡のガイドの語りにおいても、その大きな特徴は、ただ起こったことだけを話すことに徹底しているという点である。事実だけしか話さないという強い姿勢である。反戦平和やドイツ人への恨みなど、感情やメッセージ性の強い言葉がここでは完全に抑制されているのである。

追悼儀礼—SOUVIENS—TOI— オラドゥール・スール・グラヌでは、遺族会が中心となって毎年この六月一〇日に追悼儀礼が行われている。朝の九時三〇分に新しい町の教会でミサを行った後、廃墟の町に入り、市役所、子供たちが通っていた学校、皆が集められた村の広場、男性が殺された六つの納屋、そして女性と子供が殺された教会を訪れ、その後、墓地に行き献花と一分間の黙祷を捧げる。追悼の儀礼はこの六月一〇日のほかにも、イースター、一月二日の死者の日、十一月一日の第一次大戦休戦記念日、五月八日の第二次大戦終戦記念日に、それぞれ墓地で献花と黙祷が行われる。いつもおよそ二〇〜二五人くらいが参加する。オラドゥール・スール・グラヌの追悼儀礼においても、前述のグエヌウのコウメモラシオンの場合と同様に、被害者たちが連行されて虐殺された現場を行進して追体験することが重視され、儀礼の目的が事件と死者を決して忘れずに覚えておくこと、すなわち記憶し続けることである点の特徴である。

これは、日本の死者の慰霊あるいは追悼儀礼のように、招魂慰霊に重点があり死者の安らぎとは祭られ供養されることであると考えられているのとは、大きく異なる。それを象徴的に表しているのが、広島市の平和祈念公園にある原爆死没者慰霊碑の「安らかに眠ってください。過ちは繰り返しませんから」(Let all the souls here rest in peace for we shall not repeat the evil)と云う碑文である。これとオラドゥール・スール・

ル・グラヌの遺跡の入口に掲げられている、SOUVIENS—TOI(覚えておいて)つまり「(この事を) 忘れないで」というメッセージとは、きわめて対照的である。あの悪夢や愚行は二度と繰り返しませんから安らかに眠って下さいというのと、あの悪夢や愚行は決して忘れないで下さいというのではかなり対照的である。そして、前者は生者が死者に語りかけているのに対して、後者は死者が生者に語りかけているという点においても対照的である。

(3) 記憶と語りの特徴—事実と感情

日本の場合、前述したように「戦争と死」の体験者の多くに共通しているのは「同じ体験をした人でないとわからない」といういわば意識の上での閉鎖性であり、またその強調である。そして、これらフランスの事例と比較してとくに重要な点として注目されたのは、日本の元兵士や戦争未亡人、原爆などの被害者のいう「同じ体験」とは、その中に、体験した事実だけでなくそれにとまなう感情までもが含まれている、という点である。彼らのいう「わかってくれる」には、その感情の共有までもが大きな部分を占めているものと考えられる。たとえば、広島をゆるる原爆の「語り部」たちが自身の体験に加えて戦争の悲惨さや平和の強調などメッセージ性の強い語りを行い、その共有を聴衆にも求めているのなどその典型的な一例である。

この点はオラドゥール・スール・グラヌのガイドや生存者たちの語りでは大きく異なる。彼らの語りは体験した事実に限定されている。メッセージは見学に来た人が遺跡を見てそれぞれ自分で読み取ればよい、というのが彼らの語りの基本的スタンスである。ここでは曖昧なことや脚色は排除すべきことがらであるとされている。またたとえ彼自身の意見があったとしてもそれはその場では同様に排除される。この点について、私が「なぜ、自分の意見を言わないのですか」と質問すると、彼ら

は、それは「死者の尊厳を傷つける」行為なのだという。たしかに事実
に限定しない語りは、事実を曖昧化させ、記憶という理性を破壊するこ
とにつながるのである。事実だけを語るうとするオラドゥール・スール・
グラスの生存者とガイド、それに対して事実感情や主張を混入させて
あたかも死者の気持ちや代弁するかのよう語る日本の戦争体験者やガ
イド、この大きな相違は決定的である。

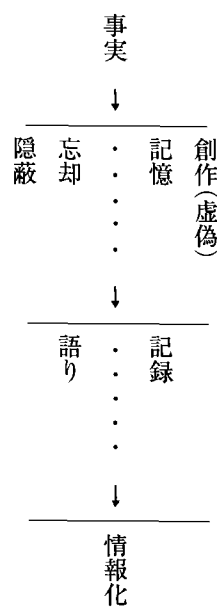
またこの点は、戦争犠牲者に対する追悼の儀礼構成においても顕著で
ある。グエヌウのコムモラシオンでは教会から虐殺現場までのプロセ
シオンを行い、オラドゥール・スール・グラスでも教会でのミサの後、
村の中の虐殺現場に赴いてそれぞれの場所で花と黙祷をささげて一巡す
る。つまり、時空を超えて共に事件が起きた現場に立つてその事実の再
確認と儀礼的再現による追体験がはかられているのであり、そのことを
たいへん重視している。それに対して日本の事例では、原爆慰霊碑など
象徴的な記念碑を前に集合して、また日本武道館など通常のホールに
集合して死者への思いを込めながら追悼や慰霊の儀式を行うという感情
的な行為が重視されている。

自我観・靈魂観の相違 事実と情報の共有に集約させるフランス、そ
れに感情を混入させ共有の範囲を拡大させる日本、両者の相違は、互い
の自我の意識の相違によるのではないかというのが民俗学の立場からの
私のここでの一つの仮説である。自分は自分、他人は他人、互いに容易
に入り混じりがたいという硬い自我のフランスの人たち、以心伝心・阿
吽の呼吸で互いに分かりあえるはずだという柔らかい自我の日本の人た
ち、の相違である。一方、それは靈魂観念にも関連している。最低限で
も事実の情報があればすでに他界の存在となってしまう死者との
間でも共有できると考えるフランスで重視されているのは、事実の儀礼
的再現であり追体験である。それに対して、事実を曖昧でも悲劇への感
情は生者も死者も現世と他界の境界を超えて互いに共有できるはずだと

考える日本で重視されているのは、慰霊という感情発信であり戦争反対・
平和宣言というアピールである。

フランスの感情を抑えた行為と、日本の感情を表に出す行為、そこに
は、死者との安易な感情共有が不可能であると考えられるフランスにおける
靈魂観念や他界観念に対して、祈りを込めれば見知らぬ死者とでも感情
共有できると考える曖昧な、融通無碍な日本の靈魂観念や他界観念が根
強く横たわっているように観察されるのである。

そして、この場でも確認しておく必要があるのは、事実とその記憶・
記録による情報化についての図のような関係性である。⁽³¹⁾



④おわりに「死者」の記憶と「事件」の記憶

本稿の論点を整理すれば、以下の通りである。

第一に、戦争体験の記憶には大別して二つのタイプがあるといつてよ
い。その一は、死者の記憶、その二は、事件の記憶である。死者の記憶
の場合には、戦闘員個人々々に対して追悼、慰霊、供養の儀礼が繰り返し
行われるのがその特徴である。それに対して事件の記憶の場合には、さ
らに二つのタイプがある。その一つは非戦闘員の大量死である悲惨な虐
殺であり、もう一つは戦闘員の激戦と勝利、または敗北である。そし
て、前者の悲惨な虐殺の場合、たとえばそれはこのグエヌウの虐殺やオ
ラドゥール・スール・グラスの虐殺からヒロシマ、ナガサキの原爆まで

多様な事実があるが、その悲惨は戦争という愚行へと読み替えられ、それを決して忘れないという意識へと昇華され、あの原初の時空へといういわば原点回帰と追体験の力が作動しているのが特徴的である。さらに、悲惨な虐殺には、加害者と被害者とがあり、加害者には事実重視と懺悔・謝罪が求められるのに対し、被害者にも事実重視と復讐心抑制・赦免への自己心克服が求められる⁽³²⁾。それに加えて、第三者である国家や裁判所など公的機関は有罪判決と刑罰を、または特赦を与える。

一方、後者の激戦と勝利の場合、たとえばそれはノルマンディー上陸作戦など、その勝利と栄光の記憶が戦勝国の側で顕彰、記念されていくのが特徴的で、一方敗戦国の側ではその犠牲となった戦闘員への追悼は公的には行われにくい。これら「戦争と死」の記憶の二つのタイプ、つまり死者の記憶と事件の記憶とのそれぞれの特徴をあらためて整理してみると、死者の記憶は「個人化される」記憶であり、事件の記憶は「社会化される」記憶であるといつてよい。そして、個人化される死者の記憶と表象は「死者」への追悼、慰霊、供養の諸儀礼としてあらわれ、社会化される「事件」の記憶とは、戦争と殺戮という「愚行」への反省と懺悔の意識化であり、一方では戦勝の記念と顕彰の行事としてあらわれる。その個人化される死者の記憶の場合には関係者世代がいなくなればその記憶の風化と喪失へ向かい、一方、社会化される事件の記憶の場合には世代交代を経ても記憶はさまざまな作用力が介在しながらも維持継承される。

第二に、フランスのグエヌウヤオラドゥール・スール・グラヌの虐殺の場合には、死者への追悼とともに彼らのことを「決して忘れない」という「事実の記憶」を重視する儀礼的再現と追体験とが中心となつているのに対して、日本の場合は、「安らかに眠ってください」という集団的な「死者の記憶」が重視され、その冥福が祈られている。そこには、日本とフランスの自我観・靈魂観の相違が反映されているといえる。フ

ランスの感情を抑えた行為と日本の感情を表に出す行為、数字と場所限定するフランスの語りと反戦平和へのメッセージをとまなう日本の語りとの対照性など、そこには死者と一線を画すフランスの靈魂観や他界観に対して、祈りをこめれば死者と感情共有できると考える生死の境界に対する曖昧な日本の靈魂観や他界観が反映しているものと考えられる。

第三に、フランスにおいても日本においても「戦争と死」の記憶の場として民俗的な伝統行事が有効に機能していることが指摘できる。フランス、グエヌウの事例においては、八月七日のコウメモラシオンだけでなく、五月に行われるトロメニにおいてペングエレックをそのスタシオンの一つに組みこんでいるのであり、日本の場合、八月の盆の月に広島と長崎の原爆記念日が、そして一五日には終戦記念日が重なって、死者をまつる日となっているのが特徴的である。終戦の日と伝統的な死者供養の日である盆行事との一致が、戦争と死の記憶を、戦争という愚行・原爆投下と虐殺の事件に対して、戦争と大量死という事実の記憶へと向かう方向力よりも、むしろ死者の記憶とその供養へと向かう方向力を強くしている要因ともいえるであろう。このように伝統行事の中に組み込まれた「戦争と死」の記憶はより強い伝承力を獲得し、その伝統行事が続くかぎりその中に自らの位置を得て継承されていくものと考えられるのである。

註

- (1) 吉田裕「戦争と軍隊―日本近代軍事史研究の現在―」『歴史評論』六三〇二〇〇二年、四〇〜五一ページ。
- (2) 鹿野政直「軍事郵便にみる兵士―高橋峯次郎宛通信をおもな素材として―」『国立歴史民俗博物館研究報告』一〇一―二〇〇三年、一四〜一五ページ。
- (3) 藤井忠俊「兵たちの戦争―手紙・日記・体験記を読み解く―」朝日新聞社二〇〇〇年。
- (4) 原田敬一「国民軍の神話―兵士になるといふこと―」吉川弘文館 二〇〇二年
- (5) 河野仁「金玉砕」の軍隊・へ生還」の軍隊」講談社、二〇〇一年
- (6) 国立歴史民俗博物館資料調査報告書一四「戦争体験の記録と語りに関する資料集」一・二(二〇〇四年)、三・四(二〇〇五年) (Personal Experiences of War 1931-1945: A survey of Japanese Written and Oral Records)
- (7) 芝 健介「国際軍事裁判論」『20世紀の中のアジア・太平洋戦争』岩波講座アジア・太平洋戦争八(岩波書店 二〇〇六年)、石田勇治「ジェノサイドと戦争」『20世紀の中のアジア・太平洋戦争』岩波講座アジア・太平洋戦争八(岩波書店 二〇〇六年)、久野 久「賠償と補償」『20世紀の中のアジア・太平洋戦争』岩波講座アジア・太平洋戦争八(岩波書店 二〇〇六年)、栗屋憲太郎他「戦争責任―戦後責任―日本とドイツはどう違うか」朝日新聞社、一九九四年、Howard Schuman and Hiroko Akiyama Barbel Knauper Collective Memories of Germans and Japanese About the Past Half-century. MEMORY. 1998.6 (4). pp427-454 などを参照。
- (8) 久保孝夫氏調査
- (9) 高野邦夫氏調査
- (10) 小屋敷清「きよしⅢ 戦後編」(自費出版) 一九九九年、二〇一〜二〇二ページ
- (11) 柏木一朗氏調査
- (12) 久保田直子氏調査
- (13) 増田芳信「想い出の戦跡―ヘンルン村附近の戦闘―」(第六中隊誌刊行会編集委員会「第六中隊誌」、一九八五年)に斎藤氏の最期を記録。
- (14) 田中はるみ氏調査
- (15) 喜多村理子氏調査
- (16) 大石和世氏調査
- (17) 柳生正文氏調査
- (18) 中村茂生氏調査
- (19) 今井昭彦氏調査
- (20) 新谷尚紀「日本人の葬儀」(紀伊国屋書店 一九九一年)において遺骨は葬儀執行のために必要なのであり、遺骨保存のためではないことを指摘しているが、戦没者の死の受容をめぐるその点があらためて確認されたといえる。
- (21) 関沢まゆみ「隠居と定年―老いの民俗学的考察―」臨川書店 二〇〇三年
- (22) 直野章子「原爆の絵」と出会う―込められた想いに耳を澄まして―」岩波書店 二〇〇四年、六三ページ
- (23) 宇吹暁「原爆体験と平和運動」藤原彰・今井清一編「十五年戦争史四 占領と講和」(青木書店 一九八九年)、藤原修「ヒバクシャの世紀―ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ―」『20世紀の中のアジア・太平洋戦争』岩波講座アジア・太平洋戦争八(岩波書店 二〇〇六年、三三二〜三三三ページなど)。
- (24) 「私は原爆で犠牲になった何万人もの人たちのなから、こうやって生かされたんよ。四十年余りのこの苦しい人生をすこしてきて、今思うことは、私がやるべきことは、その死が無駄にならないように、死者の声なき声をしっかりと受けとめて、原爆の実相を知らないあなたたちのような若い世代に私の体験を伝えることだと思ふようになった。話しているうちに、だんだん死者の気持ちがわかるようになって、見えてくる。話したことのない私だったら、他の誰かが、「これはこう、それはそうでない」といっても、「ああ、そう」といって見過ごしていただろう。目をしっかり大きく開いて、知る、ということが大切。それが悲劇を繰り返さないということ。今こうして楽しんでいても、つぎの瞬間、どうなっているかわからないということに気づかなくては。(略) ほんとうによく会いにきてくれた。この出会いを大切に。こうやって人に会いに来るといのもひとつの実践。これも何かの縁。(広島で) たくさんのことを学んで、あなたもまたいつか語り手になってください」(沼田鈴子のインタビューより) (米山リサ(小沢弘明・小澤祥子・小田島勝浩訳)『広島―記憶のポリテクス―』岩波書店 二〇〇五年、一七三〜一七四ページ)
- (25) 米山前掲書、二〇一ページ
- (26) ビエール・ノラ、工藤光一訳「コメモラシオンの時代」(ビエール・ノラ編)『記憶の場―フランス国民意識の文化』社会史 第三巻 模索」岩波書店 二〇〇三年)によれば、コメモラシオンを「記念＝顕彰行為」(四二七ページ)と訳しているが、本稿ではcommemorationを単純に「共同の記憶化」の意味を含み、またフランスの「le devoir de mémoire」(「記憶の義務」)(Emmanuel Katten "Penser le devoir de mémoire" Paris, PUFCOLL. Questions d'éthique, 2002, sur la commémoration des défunts pp.17-31)の性格を有するものと理解し、「コメモラシオン」を表記する。
- (27) Antoinette Prost 'Les monuments aux morts. Culte républicain? Culte civique? Culte patriotique?' (Pierre Nora (dir.), 'Les lieux de mémoire I',

Gallimard, coll. Quarto, 1997, pp.199)

- (28) 新谷尚紀「ブルターニュのトロメニー伝説と現在」(『国立歴史民俗博物館研究報告』一〇八 二〇〇三年)
- (29) 関沢まゆみ「死者の火—儀礼伝承の潜伏と顕在と—」(『国立歴史民俗博物館研究報告』一四一 二〇〇八年)
- (30) オルファンヌさんとエブラスさんの体験記録として Robert Hébras "Oradour-sur-Glane/The Tragedy Hour by hour" Les Chemins de la Mémoire Editeur, 1990年頃。(Translated by David Denton) を書いた後、エブラスさんは友人のデゾットさんと写真をたくさん集めて、子供の頃のオラドゥール・スール・グラヌの話を書いた (André Desourteaux, Robert Hébras "Oradour-sur-Glane Notre Village assassiné" Editions Les Chemins de la Mémoire Editeur 一九九〇年頃)。
- (31) 関沢まゆみ「記録と語り—事実をどうつかまえるか—」(『基幹研究「戦争体験の記録と語りに関する資料論的研究」平成一八年度第二回研究会「報告・討論要旨集」国立歴史民俗博物館 二〇〇六年
- (32) ジェフリー・K・オリック「悔恨の価値—ドイツの教訓—」(『国立歴史民俗博物館国際研究会「戦争体験の記憶と語り」要旨集」二〇〇七年

(国立歴史民俗博物館研究部民俗研究系)

(二〇〇七年四月三〇日受理、二〇〇八年一〇月三日審査終了)

Memories and Narratives of “War and Death” : Their Personal and Social Impacts

SEKIZAWA Mayumi

This paper discusses a study of how the deaths of soldiers killed at war impacted on soldiers who survived the war and the families of those killed, which includes both soldiers killed in action and those who died from illnesses during the war. The study is based on data obtained from “Personal Experiences of War, 1931-1945: A Survey of Japanese Written and Oral Records” I-IV, 2004 & 2005, published by the National Museum of Japanese History. A feature common to both returned soldiers and the families of the deceased was the exclusive nature of their narratives as represented by the comment “Only those who have experienced such death can understand.” In an attempt to identify the characteristics of memories and narratives of war and death from a wider perspective, the study sought to illuminate the differences between their personal and social impacts. To this end, Japanese narratives included narratives about soldiers killed in action and victims of the atomic bomb dropped on Hiroshima, and a study was undertaken of memorial services held in two French villages, Gouesnou and Oradour-sur-Glane, where civilians were murdered by Nazi soldiers.

Three themes emerged from the study. First, there are two general types of memories of war experiences, which are classified as “memories of the dead” and “memories of incidents.” Memories of the dead take the form of mourning, and holding commemorative and memorial services for individual soldiers. In contrast, memories of incidents involve two aspects. One is the tragic mass slaughter of non-combatants and the second the bitter fighting and victory or defeat of combatants. Although with respect to the former aspect the circumstances surrounding the tragic killings vary from the slaughter of civilians in Gouesnou and Oradour-sur-Glane to the atomic bombs dropped on Hiroshima and Nagasaki, these tragedies reveal the “inanity” of war. Memories of the dead are memories that have a “personal” impact, while memories of incidents are memories that have an impact on “society.” Memories of the dead with a personal impact are symbolized by the mourning of the “dead” and various memorial rites and services, while memories of “incidents” with a social impact take the form of reflection on the “inanity” of war and bloodshed and a feeling of confession, as well as events that commemorate and celebrate victory. Memories with a personal impact fade and are lost with the passage of time as the generations of those with personal experience and the generations of involved parties die out. Meanwhile, memories of incidents that have an impact on society are retained and continued despite the mediation of a variety of acting forces, even though there is generational change.

Secondly, the two French cases comprise mainly of remembering the dead and a ceremonial reenactment

and reliving that emphasizes "reaffirming the fact" so that the dead will never be forgotten.

Thirdly, traditional popular rituals and events function effectively as the place of memories of "war and death" in both Japan and France. In addition to a commemoration ceremony held in Gouesnou, France on August 7, a new station called Penguérec has also been incorporated into the *troménie* held in May. In Japan, the dates of the anniversaries of the bombing of Hiroshima and Nagasaki and August 15 marking the end of the Pacific War all fall during the "o-bon" season, and so are days when the dead are honored. Rather than creating a momentum directed at "reaffirming the fact" of the inanity of war and the carnage caused by the atomic bombs, there is a strong momentum directed at collective commemoration that "remembers the dead" and asks for their peaceful repose. The hypothesis here is that the difference between the two is related to how each one views the self and the spirit.